

一七 定方末七郎 (塊石)



一九〇〇年三月、卒業記念
アルバム「旧関西学院時代Ⅱ」より

雄、具体美術協会の洋画家村上三郎、国画会版画家川西祐三郎、立軌会洋画家片岡真太郎、新制作協会の石阪春生など枚挙にいとまない。

これらの画家を生む母胎の一つが絵画部弦月会であったが、その弦月会が誕生した一九一六年に画家として、それも聖画家として活躍し始めていたのが、定方末七郎(塊石)である。また、関西学院がキリスト教主義学校としての色彩を色濃く残してきたこの時代にあつて、キリスト教信仰

関西学院が生んだ画

家・彫刻家は数多く知られている。戦後だけに限つても具体美術運動を主催した吉原治良、油絵具の研究で

著名な大森啓助、独立美術協会の野口彌太郎、二紀会の洋画家児玉幸

と画家とが渾然一体化した定方の生き方は、現在の関西学院にとつて、その原点を振り返る意味でも、今一度振り返る意味もあろう。これまで美術史でも言及されることの少なかつた定方末七郎(塊石)の生き方と作品をここに紹介する。

I はじめに

定方末七郎は、現在の真庭市に生まれた。幼年期より父の薦めもあつて組合系の講義所に通いキリスト教に接し、大きな影響を受けた。それもあつて、高等小学校卒業後にはキリスト教主義学校の薇陽学院びやうに入学したものの、廃校により関西学院に入学した。学院では自助会で牛乳配達をしながら生活費を工面し、関西学院基督教青年会で活躍し、「Maya Arashi Ino.3」の編集に携わつた。この時期、武用五郎辺衛、畑敏三、乾精末、神崎驥一と既知となり、生涯交流を深めた。

幼少の頃より絵心があつた定方は、院長吉岡美国の薦めもあつて、在学中に京都の仏画家巨勢小石こせひさしのもとで絵画を学ぶこととなつた。後に本格的に画家修業を行うなか、巨勢はクリスチャンである末七郎に日本画でキリストを描く

ように薦めた。

ここにキリスト画家定方末七郎は誕生した。一九一〇年代初めから作品を発表し、一九二一年に「観音像」を帝展に出品するが落選。しかしこの作品はその後フランスのサロン・ドートンヌ美術展で入選、藤田嗣治画伯とともに大使館に招待されるなど、画家としてしだいに知られるようになった。

一九二二年から二五年にかけて、欧米へ絵画修業に出発し、キリスト教美術に接し、またベツレヘムなどの聖地を訪ねながら、「心に悟った基督は神である人間にその御姿を求め全世界を漁るとも何ぞ之を人間に求め得んや、直敷心を静め祈り求め、御聖霊の御力によつて我心に御姿を見、御姿を宿し、而して靈筆を揮はずば、何を以つてか權威有る基督を描き得んや」と信じ、帰国した。

帰国後の定方は東京に居を移し、画業と教会活動に務めていたが、東京大空襲で多くの作品を焼失した。故郷に帰り学院で得た同郷の生涯の友人武用五郎辺衛の支えの中、聖書と讚美歌を大切に抱え、日曜日の礼拝と水曜日夜の祈祷会は一回として欠かさことなく、静かな環境の中で多くの聖画を描き続けた。

II 略歴^②

一八八二年 六月二六日

定方喜与治・民の七男として、岡山県真庭郡久世町（現、真庭市久世町）で生れた。

一八八八年

この頃から基督教講義所に通い始める。学問をさせたいという父の願いで、自宅の隣にあった組合系の基督教講義所の日曜学校に通った。この講義所で小松鉄一郎に出会い晩年まで親交を続けるほど大きな影響を受ける。^③

一八九五年 六月

高等小学校を終え、秋に岡山にある薇陽学院に入学。しかしまもなく廃校となる。経営者の一人であるJ・H・ペター (Petree) 宣教師の手配で関西学院への入学を決める。^④

一八九六年 一月二日

柴田勝衛、西条了とともに薇陽学院から関西学院へ入学。翌日から寮生の渡辺正五郎の勧めで自助会の牛乳配達を始める。^⑤

二〇日

柴田勝衛と共に関西学院基督教育青年会

二月九日

（以下基督教青年会と略記）に入会。⁽⁶⁾

基督教青年会例会で「古ヲ顧ミテ努力セヨ」を演説。⁽⁷⁾

一八九七年 春

幼い頃から絵を描くことが好きで、将来は画家を志していたので吉岡美国院長に相談をする。⁽⁸⁾

夏

巨勢小石⁽⁹⁾という京都の画家の元で、夏休みの間修行。

夏休みに入り同級生と摩耶山で祈祷会

を行い祈っている時、聖言「神を信ぜ

よ。誠に汝に告ぐ。人もし此の山に移

りて海に入れよ」と言うとも、其のい

うところ必ず成るべしと信じて心に疑

はずばその如く成るべし（マルコ一

章二二〜二三）を与えられる。この御

言葉は生涯の支えとなるものであつ

た。御業は直に叶えられて下山すると

院長室に呼ばれ「京都に望む師が見つ

かったので直ぐ出発するように」と吉

岡院長が準備をしていくれた。爾後

二ヶ月の京都遊学に出発。⁽¹⁰⁾

一〇月二日

基督教青年会例会で「神ヲ知ラザル英雄ハ計ルニ足ラズ」を演説。⁽¹¹⁾

一八九九年 夏

再び京都に行き、働きながら絵を学ぶ生活を送る。当時の体重は八貫五匁（約三五キ口位）であったという。この頃、

武用五郎辺衛（同郷である）、畑歎三、

乾精末、神崎驥一等の生涯の友と出会

う。⁽¹²⁾

基督教青年会の役員改選が行われ幹事

に選出、記録書記になる。⁽¹³⁾

二月一日

「Maya Arashi」no.3発行。編集長を務める。⁽¹⁴⁾

二月一日

基督教青年会例会で「勉強忍耐ト光

陰」を演説。⁽¹⁵⁾

一九〇〇年 三月

関西学院普通科を卒業。四年振りに帰郷。⁽¹⁶⁾

四月

関西学院英語専修科に進級。⁽¹⁷⁾

五月二八日

基督教青年会の役員改選で図書係に就任。⁽¹⁸⁾

七月七日

大阪商業学校（現・大阪市立大学）英語会公会に出演、日ごらの成果を発

揮。⁽¹⁹⁾

一九〇二年二月

この頃まで基督教青年会で活躍した記録がある。また英語専修科の第二学年秋（一九〇一年）まで学籍簿が残っているが、三年に進級した記録は残っていない。⁽²⁰⁾

二月 一日

甲種合格となり、鳥取の姫路第一〇師団歩兵第四〇連隊に入隊。⁽²¹⁾

一九〇四年 五月二九日

日露戦争開戦にともない（二月一日）、宇品港を出発し、一〇月満州南部の三塊石山の攻防（二〇〜二四日）で殊勲を挙げ金鵄勲章を受ける。従軍中も敵弾にはあたらないと確信、五錢で購入した画帳に進軍中の戦場などを写生し、それを明治天皇に献上。⁽²²⁾ 終戦・講和条約締結（九月五日）で、内地に帰還。

一九〇五年二月 一日

帰朝報告と宿願の絵の修行のため上京（京都）する途中に関西学院に立ち寄り、院長はじめ学院の先生、生徒達の大歓迎を受ける。京都の巨勢小

石宅でも大歓迎。絵の勉強に本腰を入れる。

巨勢師は伝統的な仏画家であったが、クリスチャンである方方には日本画でキリストを描くように薦める。⁽²³⁾

一九〇六年 四月

この頃から夏頃まで関西学院寄宿舎の監督に従事。夏頃から巨勢師のもとで絵の修行に励む。⁽²⁴⁾

五月二六日

関西学院青年文学会で日露戦争の実践談を披露。⁽²⁵⁾

九月三日

神戸美以教会（現・神戸栄光教会）より京都中央基督教会（現・京都御幸町教会）に転会。⁽²⁶⁾

一九〇七年二月 七日

京都中央基督教会より五条講義所（現・京北教会）に転会。日曜学校長を務める。⁽²⁷⁾

一九〇八年 三月二七日

関西学院第一八回卒業式に参列。「笹森博士ノ理想トハ」の演説。⁽²⁸⁾

第一回同窓会総会が開催され、評議員に選出。⁽²⁹⁾

「雅号」を塊石とする。先の戦争の

三塊石山での勇士の名を記念すると共に、恩師巨勢小石からの名を別たれたるものなり」。

一九〇九年 三月二〇日

戦捷記念碑建立。前年、西川玉之助が旅順より送られた二八珊知重砲弾に「戦捷記念」の文字を刻し、後ろに「明治四十二年陸軍記念日従軍同窓生建之」と刻み、扇型の台石に西川玉之助、定方末七郎、武用五郎辺衛等一四名の名を刻む。

四月二七日

第二回同窓会総会開催、役員に再選される。

一九一〇年 四月 九日

吉岡美国院長母永眠（八日）。関西学院礼拝堂の葬儀に参列。

九月 七日

巨勢の四女徳子と結婚。京都で初めてのキリスト教的家庭結婚式を巨勢宅で挙行、京都五条に居を構える。

一九二二年 二月二〇日

長女喜美誕生。

一九三三年 一〇月

親友の武用五郎辺衛の依頼で描いた金屏風を携え、備前香登に届けに行く途中、関西学院に立ち寄る。

一九二四年〜二年

巨勢が昭憲皇太后御大喪絵巻の作成を宮内庁から受け、定方も協力。

五年で完成し宮内庁に納入。納入の報告を受けて巨勢は死去。其の悲しみと祈りの中で「観音像」を描き帝展に出品（一九二二年）するが落選。（その後、同作品はフランスのサロン・ドートンヌ美術展で入選、藤田嗣治画伯とともに大使館に招待される）。

一九二七年 三月 五日

第九回同窓会総会に出席、評議員に選出される。

一九一九年 一月 五日

長女喜美、妻徳子とともに受洗。

一九一九年 六月 二四日

母民を岡山から呼び寄せる。

一九二二年 二月 二七日

長男富太郎誕生、幼児洗礼。

一九三三年 六月 二〇日

旧友の神崎驥一、畑歎三の勧めにより欧米への旅へと神戸より箱館丸で出発。

上海經由マルセイユ到着。同窓の神原浩の出迎えを受け、パリでの宿泊所も手配が出来ており、到着翌日アカデミアジュリアンへの入学手続きを済

一九三三年、三四年

ませることが出来た。またドイツのオパマルガで一〇年に一度開催されるという聖劇を見ることができ感動した。乾精末とアルプスで遊び、パリでは新渡戸稲造の知遇を得る。⁽³⁷⁾

九ヶ月後、米国に渡り、ボストンでは日本で知り合ったカール・アダムス氏のところで三ヶ月、そこで知り合った日本人の紹介でシカゴでも働いたが、少し離れたグラランド・ラピッズ (Grand Rapids ミシガン州) のスチックリーという人の会社で家具に日本画で花鳥を描くという仕事が見つかり、一年三ヶ月働き、旅費を貯め再度欧州へ戻る。⁽³⁸⁾

一九三五年

イギリスのバッキンガム宮殿、ウエストミンスター寺院、フランスのリヨンの大聖堂、イタリアのサンピエトロ大聖堂の美と偉大さに圧倒され、「我れはこの磐の上にわが教会を建てん」といったベテロの言葉が実現さ

れているのを実際に見て感動。パチカンのミケランジェロ「天地創造図」、「最後の審判」をみて驚き、この遊学の価値を得たと感激。

ポンペイの遺跡に行き旧約聖書にあるままの町に感涙をし、エジプトのピラミッド、スフィンクス等を見て最後に聖地エルサレムに着く。エルサレムではキリストの足跡を辿り、聖書の記事を読み合わせながら楽しく見学し、写真もたくさんすることが出来る。

ベツレヘム、ナザレのオリーブ山、ベタニア、エリコ、ヨルダン川、ナカの地、ガリラヤ湖等を見学し、イエスが在世中祈りをささげたことを思い、祖国を離れこの聖地まで招かれたことに感謝。

「その時心に悟った基督は、神である人間にその御姿を求め全世界を漁るとも何ぞ之を人間に求め得んや、宜敷心を静め祈り求め、御聖霊の御力によつ

二月二五

て我心に御姿を見、御姿を宿し、而して
靈筆を揮はずば何を以つてか權威有
る基督を描き得んや、最早足れり、旅
行を打切つて日本に帰る可と」⁽³⁹⁾。

神戸港に着き、先ず関西学院に吉岡美
国を訪ね、神崎驥一に帰朝報告。その
船で横浜に回り、東京で小林彌太郎に
謝辞を述べる。⁽⁴⁰⁾

三日 東海道線で京都へ帰宅。⁽⁴⁰⁾

一九二六年 二月二日

関西学院中学部青年会の早天祈祷会
で、「感話―エルサレムの報告」⁽⁴¹⁾。

一五日

京南教会（現・日本キリスト教団京
北教会）にて歓迎会。⁽⁴²⁾

二五日

京南教会にて礼拝説教「エルサレム印
象」⁽⁴³⁾。

二月二日

京南教会での会議で幹事に選出。⁽⁴⁴⁾
大阪・神戸で帰朝後の記念展覧会を開
催。サロン・ドートンヌ入選絵画は神

一九二六年〜三〇年

戸で三千五百円で売れる。「富士百景
」の木版画の原画の製作を勧める人が
あり、定方はその計画を快諾。一年余

一九三〇年 春

り写生旅行をし、八分通り原画も出来
上がったので、一九三〇年の正月、最
後の写生旅行に出かけようと上京（東
京）した所、計画者は支払いができな
いと言い出し、結果的にはその話はな
かった事になった。この事で、一時写
生旅行を取り止め、京都を引き払い家
庭を東京に移さねばならないと決意。⁽⁴⁵⁾
東京へ転居。

「平和の基督―基督御聖像―」第一
作を完成。⁽⁴⁴⁾

一九三二年 四月二八日

「平和の基督―基督御聖像―」を関
西学院に寄贈。時計台（旧大学図書館）
の正面に掲げる。⁽⁴⁵⁾

一九三五年 五月

「受難の主イエス」を京南教会に贈
る。⁽⁴⁶⁾

一九四〇年 二月

「緑の野いこいの水辺」（詩編二三篇）
を西川玉之助の依頼で描く。⁽⁴⁷⁾

一〇月三日

「聖画展」（一四日）を日本メソヂ
スト本郷中央会堂（現、日本キリスト
教団本郷中央教会）で開催。小林彌太

郎や同窓生乾精末のいる日本メソヂス

ト本郷中央会堂に所属し、画業の傍ら

家庭集会を開催し、理事を務めるなど

教会活動にも励む。⁽⁴⁸⁾

一九四四年 三月 四日

妻徳子死去。⁽⁴⁹⁾

一九四五年 三月二〇日

第二次大戦の東京大空襲によって自宅

三月末

を焼失。⁽⁵⁰⁾

関西学院の同窓であり親友でもある武

用五郎辺衛の信仰と友情を頼りに帰

郷。⁽⁵⁰⁾

一九四六年 二月

「柔和なる基督」を香登教会に贈る。⁽⁵¹⁾

一九六六年 二月 二八日

死去。⁽⁵²⁾

Ⅲ 作品一覧

最後に定方末七郎の残した絵画を関西学院所蔵のものを中心に次にあげておく。

	年代	タイトル	雅号	形態	備考
1	一九〇〇	「菊花二種」(「Maya Arashi」no.3)	定方末七郎	表紙絵	
2	一九一三	「花鳥図屏風」	塊石	二曲一双(押絵帖)(七三×三〇cm)	
3	一九一七	関西学院同窓会誌第一号 「夏山深遠」	塊石	不明	原画は不明
4	一九二七秋	「移転前の上ヶ原風景」	塊石	額装 (三〇×一一〇cm)	本部棟三階応接室

19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5
一九三六頃	一九三一	一九七三	一九三一	一九三〇	不明	一九三〇頃								一九三〇頃
「三聖図」―基督・釈迦・孔子―	「最後の晩餐」第二作	「基督御聖像―我にきたれ―」（複製）	「平和の基督―基督御聖像―」（複製）	「平和の基督―基督御聖像―」第一作	「人物図」	塊石版画「富士」 ①「飛鳥山の桜と富士」	⑧「原の桃と富士」	⑦「大井川の橋と富士」	⑥「音止の滝と富士」	⑤「狩野川と富士」	④「小田の旧家と富士」	③「佐野村と富士」	②「浜名湖弁天島と富士」	①「酒匂川と富士」
耀慶	耀慶	七郎	塊石定方末七郎	耀慶	塊石豊敬	塊石								塊石
不明	額装	紙本（カラー印刷） （五・一五×三六・五cm）	（四〇×二一cm）	軸装 （二七八×九六cm）	額装 （五八×四二cm）	紙本 （着色木版画・印刷） （二七×三五cm）								紙本 （着色木版画・印刷） （二七×三五cm）
一〇月一五～三二日神田美土代町YMC A開催の第二回基督教美術展に出品（薬書になる）	本郷中央教会所蔵	頒布用 同窓会制作	頒布用 （五〇銭）			頒布用 （二五〇円） 二五葉の内、一葉								頒布用 （八〇円）

36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	
											不明	不明	一九四〇	一九四〇	一九四〇	一九三六頃	
⑫「復活」	⑪「十字架にかかり給う」	⑩「最後の晩餐」	⑨「ニコデモとイエス」	⑧「マグダラのマリアの悔い改め」	⑦「浪を鎮め給うイエス」	⑥「キリストの御受洗」	⑤「イエスの少年時代」	④「聖家族エジプトへ避難」	③「郷里ベツレヘムへ帰る」	②「キリスト誕生」	①「乙女マリア」	キリスト伝版画集（一三葉）	「宮潔めの基督」	中央会堂五十年史 「中央会堂」	中央会堂五十年史 「シオンの山」	「緑の野いこいの水辺」	「聖母子」
											耀慶	耀慶	耀慶	耀慶	耀慶	耀慶	
											色紙 （着色コロタイ プ版）	軸装 （二七九×一三三二cm）	裏表紙見返し図	表紙見返し図 （二二〇×五〇cm）	軸装	不明	
											頒布用 外にも三葉同シリーズ のものと思われるもの がある。		原画は不明	原画は不明		一〇月一五～三一日神田美土代 町YMCA開催の第二回基督教 美術展に出品（基督教年鑑昭和 十二年版）に掲載）	

48	不明	「大陸の川」	塊石	額装 (三四×四五cm)	
47	一九五一	「富士山麓山中湖キャンブ風景」	塊石	額装 (八六×一四五cm)	中学部
46	不明	「達磨大師」	大塊	色紙 (一一三×五〇・五cm)	
45	一九六〇	「富士」——七八翁——	大塊	軸装	
44	一九五九	「南北二寮——創設期の関西学院——」	大塊	色紙	『目で見る七〇年史』に掲載
43	一九五八	小松鉄五郎書簡稿集	大塊	表紙絵(装幀)	岡山県立図書館所蔵
42	不明	「くずとかたつむり」	大塊	色紙	
41	一九四八	「基督山上垂訓図」	大塊	額装 (幅三尺二寸×長さ六尺五寸)	一〇月にマッカーサー元帥に贈呈(詳細は『月刊もともやま』第一七号 昭和二四年一月号)。
40	一九四六	「柔和なる基督」(複製)	大塊	額装 (三八×二六・五cm)	香登教会にもあり
39	一九三五	「受難の主イエス」	不明	不明	京北教会(現在は不明)
38	不明	「我に来たれ」	耀慶	紙本 (着色コロタイプ版) (三八×三〇・五cm)	
37		⑬「我に来たれ」			

・備考欄に所蔵の記載のないものは学院史編纂室所蔵である。
 ・「美術品台帳(部課別所蔵リスト)」「写真目録(学院史編纂室)」を参照しながら、より正確な記述となる様つとめた。

IV おわりに

彼の残した言葉―定方塊石「一代を紙屑にして」(「柔和なる基督」の添え書)―より

「天にまします父なる神様よ、私は誠に取るに足らぬ、いと小さき画家でございますが、やむにやまれぬ心の願いにより拙い絵筆を動かして、漸く柔和なる主を繪き奉りました。私には聖画を目標とする外道は無く、朝な夕なに絵筆を取り、主の御姿を顕さんものと勉め励んで参りましたが、思いのままに筆は動かず、過ぎにし一代の大部分は、紙屑同然の生涯で御座いました。然れども主よ、あわれみ給え、この拙き筆の絵姿を受入給うて、何卒敗戦日本の救いの一役を務むるに至らしめ給わん事を切に切に御祈りし奉ります。この絵によつて人々の心を明るくし、悪念を去らしめ、祈る心を起こさしめ、主の御栄光が広く顕わるる其の一部分の役にでも立つ事を得ば、此上無き幸いで御座います。主よ、主の御栄光の為には私共師弟の過去の如きは何物でもありません。それは何等価値無きものであります。主よ、私は只、主の御名こそ尊く永遠に崇められんことを祈ります。尚此祈りに付け加えてお願い致します。主よ、願わくば聞き給え、残れる私の晩年生涯を御聖別下さ

れて、主の御用を務めさせて戴きたく御祈り申し上げます。

昭和二十二年二月 定方大塊

聖書と讚美歌を大切に抱えて、日曜日の礼拝と水曜日夜の祈祷会は一回として欠かした事はなかったという、実に高潔な人柄、敬慮な一生であった。⁽⁸²⁾

【注】

(1) 『関西学院事典』三五頁。

(2) 以下の略歴を書くに際して、主として以下の文献を参照した。藤原謹一『聖徒のあしあと―香登教会八〇周年記念誌―』(日本イエス・キリスト教団香登教会、一九七六年、四九頁)、『自伝―畑歎三教授宛書簡―』(学院史編纂室資料、S1-SK)、『京都中央教会会員名簿』(京都御幸町教会、学院史編纂室資料、Y2-KG)、『証明書綴』(学院史編纂室資料、DA6)。なお、前掲書『聖徒のあしあと』によれば彼の誕生日は三月一日となっている。

(3) 前掲書『聖徒のあしあと』五〇頁、前掲『自伝―畑歎三教授宛書簡―』、竹中正夫『倉敷の文化とキリスト教』(日本基督教団出版局、一九七九年、三四〇～三五一頁)、『小松鉄一郎書簡稿集』(一九五八年、表紙絵、一七二)

一七五頁）。

小松鉄一郎（一八六七～一九五四）は京都同志社英学校に通い、大阪天満教会で本間重慶牧師に英語を学んだ際に勧められて教会に出席。その後病を得て同志社を退学し帰郷。明治一九年三月、落合教会で洗礼を受けこの久世講義所を手伝っていた。家族の反対にあいながらも着実に村人に敬愛された基督者で、「作州の聖人」と呼ばれた。晩年『書簡稿集』を上梓した際、末七郎はその装幀を引き受け、折々の心境などの手紙も掲載されている。

- (4) 土肥昭夫『京のある教会の歩み―京南・京北教会史―』（日本キリスト教団京北教会、一九八四年、二二頁）、前掲書『聖徒のあしあと』五〇頁、前掲「自伝―畑歛三教授宛書簡―」。薇陽学院は一八八九年に設立された岡山英語学校が一八九二年に改称された学校である。アメリカン・ボード派遣宣教師ローランド（G.M.Rowland, 1859-1941）、ペテ（J.H.Petee, 1851-1920）と数人の日本人教師等の経営する英語・漢文・数学等を教える学校であった（『来日西洋人名事典』日外アソシエーツ、一九八三年）。経営難のため一八九五年暮、廃校となった。前年の一八九四年、小説家正宗白鳥（忠夫）もこの学校で学んだが廃校となったので、その後東京専門学校（早稲田の前身）英語専修科に進んでいる。薇陽学院の様子は正宗白鳥の作品『地獄』、『内村鑑三』、『空想の天国』

などで紹介されている（中林良輔「薇陽学院時代とキリスト教」『論叢』（玉川大学文学部紀要、第三六・三七号、一九九五・一九九六年）、『薇陽』（編集兼発行者山下虎之助、印刷所岡山孤児院出版部、一八九四年。岡山県立図書館所蔵）。

- (5) 前掲書『聖徒のあしあと』五一～五二頁。
 (6) 『関西学院青年会記録 自明治三二年一月～至明治三二年六月』関西学院キリスト教教育史資料Ⅰ（キリスト教主義教育研究室、一九七六年、四五頁）。
 (7) 前掲書『関西学院青年会記録』五〇頁。
 (8) 前掲書『聖徒のあしあと』五〇頁、前掲書「自伝―畑歛三教授宛書簡―」。
 (9) 『二〇世紀物故日本画家事典』美術年鑑社、二〇〇八年、一六七頁。巨勢小石（一八四三～一九一九）の生家は代々八田久佐衛門と名乗る仏画師。江戸（東京）に遊学した後、本姓である巨勢に復姓し金岡の三八世の孫と称する。東京美術学校教授となり数々の賞を得、明治二七年辞して京都に帰る。日本南画協会の結成に参加し、その後は皇室御用画を揮毫、仏画や花鳥画を得意とした。
 (10) 前掲書『聖徒のあしあと』五〇頁。
 (11) 前掲書『関西学院青年会記録』五七頁。
 (12) 前掲書『聖徒のあしあと』五四頁。なお、乾精末については、井上琢智「乾精末」（『関西学院史紀要』第十一

- 号、二〇〇五年、二八九～二九九頁）を参照のこと。
- (13) 『関西学院青年会記録 明治三二年六月～至明治三六年二月、明治四二年四月～至大正五年一月』 関西学院キリスト教教育史資料Ⅱ（キリスト教主義教育研究室、一九八〇年、八～九頁）。
- (14) 『Maya Arashi』 no.3 (190012)。なお、神崎高明『The Maya Arashiを読む―原田の森のカレッジペーパー―』 関西学院史紀要 第十一号（二〇〇五年、二〇七～二一八頁）を参照のこと。
- (15) 前掲書『関西学院青年会記録』 関西学院キリスト教教育史資料Ⅱ、一四頁。
- (16) 『関西学院同窓会報』 第三号（一九〇〇年、六～七頁）、前掲書『聖徒のあしあと』 五五頁。
- (17) 前掲書『関西学院同窓会報』 八頁。
- (18) 前掲書『関西学院青年会記録』 関西学院キリスト教教育史資料Ⅱ（一七～一八頁）。
- (19) 前掲書『関西学院同窓会報』 一四頁。なお大阪商業学校は一八八〇年に「私立大阪商業講習所」として創立された。一八八九年九月「市立大阪商業学校」と改称。また一九〇一年四月には「市立大阪高等商業学校」となり、一九〇四年二月専門学校として「大阪市立高等商業専門学校」となった。一九二八年「大阪商科大学」と改称され、戦後、新制大学化することにより大阪市は総合
- 大学化を決意、一九四九年四月、「大阪市立大学」の創設となる（『大阪府教育百年史』 第一巻、大阪府教育委員会、一九七三年、五〇九～五一三頁。『大阪市立大学の二二五年』 大阪市立大学、二〇〇七年、八四～九〇頁、一七三頁）。
- (20) 前掲書『関西学院青年会記録』（関西学院キリスト教教育史資料Ⅱ、五七頁）、「学籍簿」（学院史編纂室資料、DB/6-1）。
- (21) 『図録 日清日露戦争と鳥取―歩兵第四十連隊の創設―』（鳥取市歴史博物館やまびこ館、二〇〇九年一〇月、二二、三六、四六、七〇頁）。歩兵第四〇連隊は明治二九年一月、大阪の歩兵第二〇連隊の仮兵舎として連隊本部と第一大隊とで創設され、明治三〇年四月になって鳥取に移り常駐し第二大隊を編成、同年一二月第三大隊を編成した。
- (22) 前掲書『聖徒のあしあと』、五六～六〇頁、前掲「自伝―畑歛三教授宛書簡―」、前掲書『図録 日清日露戦争と鳥取―歩兵第四十連隊の創設―』 四五～五二頁。三塊石山は満州南部の沙河の近くにある小山の名前。現在は開発のためなくなっている。
- (23) 前掲書『聖徒のあしあと』 六一～六二頁、前掲「自伝―畑歛三教授宛書簡―」。
- (24) 『関西文壇』 第二号、一九〇七年七月、九九頁。

- (25) 「村上博輔日記抄 四」〔関西学院史紀要〕第十号、二〇〇四年。
- (26) 『会員名簿 京都美以中央教会』日本キリスト教団京都御幸町教会（学院史編纂室資料、Y/2-KG）。
- (27) 前掲書『会員名簿 京都美以中央教会』、『西部年会神戸部京都区四季会記録 一九〇七年七月〜一〇月京都美以中央教会』（日本キリスト教団京都御幸町教会、学院史編纂室資料、Y/2-KG）。
- (28) 『関西文壇』第五号、一九〇八年九月、九六頁。
- (29) 『関西文壇』第七号、一九〇九年七月、五一〜五三頁。なおこの戦捷記念碑は当初原田の森の礼拝堂の真下に建立されたが（後載）、現在は砲弾の部分はなくなり、台石のみが高中部礼拝堂東方の小道の植え込みの中にある。二度の移転にも耐え、文字も消えかけてはいるがひっそりと置かれている。
- (30) 『関西文壇』第九号、一九一〇年五月、六九頁。
- (31) 前掲書『聖徒のあしあと』六二頁、前掲書『京のある教会の歩み』二二頁。
- (32) 「洗礼入会志願者綴 京南教会」日本キリスト教団京北教会（学院史編纂室資料、Y/2-KK）。富太郎の誕生および洗礼については定方信子氏（長男富太郎の妻）聞き取り（二〇〇九年十一月二七日）による。なお、今回の聞き取りに際しましては、定方信子氏にお世話になりました。記してお礼申し上げます。
- (33) 『関西学報』第一七号、一九一四年、二二〇頁。
- (34) 前掲書『聖徒のあしあと』（六二〜六三頁）、前掲「自伝―畑愼三教授宛書簡―」。
- (35) 『関西学院同窓会誌』第二号、一九一七年九月、一八〜二〇頁。
- (36) 「転会状綴 京南教会」（日本キリスト教会京北教会、学院史編纂室資料、Y/2-KK）、前掲書『京のある教会の歩み』（二三頁）、前掲書『聖徒のあしあと』（六二頁）。
- (37) 前掲「自伝―畑愼三教授宛書簡―」によれば「神崎曠一、畑愼三等の旧友の努力により外遊の話が進められ、画業の助言は鹿子木孟郎（同郷の画家）、経済的には小林彌太郎（東京の実業家）両氏より応援を受けられるよう話しがついているから、家族の生活については心配はないということであつたので、外遊の決心をする」。
- 小林彌太郎（二八八八〜一九六九）は東京の砂糖卸問屋を営む実業家である。東京キリスト教青年会の青少年活動や、日本メソヂスト本郷中央会堂を中心とする教会活動にも多大な貢献をした。戦前関西学院の理事も長く務め、初期中部キャンブのテント一式も小林からの寄贈のものである（『本郷中央教会百年史』日本キリスト教団本郷中央教会 一九九〇年、斉藤実『東京キリスト教青年会百年史』（東京キリスト教青年会 一九八〇年）、

関西学院史資料（バーチカルファイル）。

神原浩については、金井紀子「関西学院の美術家―神原浩と北村今三―」『関西学院史紀要』第六号（二〇〇〇年、三六―四九頁）に詳しい。

オ・パマルガの聖劇はキリストの受難劇で、南ドイツのオーバーアマルガウで一〇年ごとに開催されている。一六三三年、この地方でベストが大流行し、同地の一歩手前で治まったのを感謝した住民は、イエス・キリストの受難を演じることを神に誓い、以後数百年にわたりさまざまな困難にもかかわらずこの伝統を守ってきた。アマチュアの出演者たちによる信仰告白ともいえるこの伝統と誓いは堅く守られており、世界中の旅行者を魅了している。ちなみに二〇一〇年は開催年にあたる（『新カトリック大辞典第三巻』（研究社、一九九六年、九五―三頁）、*Broekhaus Enzyklopädie*, Bd.16, Mannheim: Broekhaus 19, Auflage, 1991, s.62.）。

(38) 前掲「自伝―畑歛三教授宛書簡―」グランド・ラビッツは、豊かな森林資源を用いたドイツ移民による家具の生産地であり、一九世紀末にはアメリカ最大の家具生産地であり、家具博物館・美術館がある（『コンサイス地名辞典―外国編―』三省堂、一九七七年）。

(39) 前掲「自伝―畑歛三教授宛書簡―」。

(40) 前掲「自伝―畑歛三教授宛書簡―」。

(41) 「青年会記録 一九二四―一九二六」関西学院中学部（学
院史編纂室資料、D3-5）。

(42) 「京南教会記録」日本キリスト教団京北教会（学院史編
纂室資料、Y2-KK）。

(43) 前掲「自伝―畑歛三教授宛書簡―」。この決意は「聖
画事業を成すに余りにも臆病であった。金を握らなければ、
基督で生活ができぬと考えたのが間違いであったと
神の御前に悔いることであった」。

(44) 『日本メソヂスト時報』第二四〇三号（一九三八年七月
八日）。「この絵は初めてキリストを画いて世に問うたも
のであり、根岸の共励会に納めたものであるが、その共
励館が火災にあい全焼した時、不思議なことにその灰の
中から縁が焦げた位で拾い出されたものであった」。

前掲書「自伝―畑歛三教授宛書簡―」によれば「私は
元来浮世の希を持って居ない。成功して高位高官など云
う望みは持たない。又、大金持ちに成ろうとも思うて居
らぬ。只、願う事はたとひ假令身はほろ檻樓を纏うとも、
筆に主イエスを繪き顕す事を得ず、我天職を果たされた
るなりと云う主義で有る。其の点より申せば今の東京の
生活は其の理想に到達の第一歩とも申せましよう。我生
涯を神の御前に裸にせられたり。我何をか成さん。全く
神に前途を御任せし、神の者として献げ、御導きのまま
に進むなり。今後こそ我本生涯、過去は皆準備の生涯な

り」。

雅号については、この「平和の基督」の添え書である「宣明書」に以下のように書いている。「『大塊』の雅号は余が特に基督を揮毫するときのみ、謹んで用いるものなり。『塊石』は巨勢師と師弟の關係上、『観音・羅漢等の仏画』に用いたれば、基督に用ゆること不可なり。永く祈りの結果特に他の雅号を用いんと決し、『大塊』といったしたり」。

この「宣明書」の書かれた年代は不明だが、初めて画かれた「平和の基督」の絵と一緒にあることから推測すると、この絵を描いた当時のものとも思われる。又、彼は「耀慶」という雅号を用いているが、この雅号の来歴は不明である。この「耀慶」で書かれたキリスト像の絵も多い。定方信子氏からの聞き取りによれば、「耀慶」の雅号は、東京時代に用いられたもので、「大塊」は香登時代になってから用いられたということである。

- (45) 『関西学院新聞』第六四号（一九三一年四月二〇日）、「定方末七郎書簡―神崎驥一院長宛―」（一九三二年一月一八日）。なお「平和の基督―基督御聖像―」第一作は現在、学院史編纂室が所蔵。

「最後の晩餐」第二作は小林彌太郎に贈られた。その後本郷中央教会に寄贈され（本郷中央教会七十年の歩み）（日本キリスト教団本郷中央教会、一九六〇年、

四八頁）、現在も教会に掲げられている（本郷中央教会百年史）（日本キリスト教団本郷中央教会、一九九〇年、二四頁）。

- (46) 前掲書「京南教会記録」一六九、一九一頁。なお、この「受難の主イエス」は、東京で開催された「カトリック聖画展」（一九三五年）に出品された後、京南教会に寄贈された。定方は上京した後もこの京南教会の管理人（教会財産を保管する者で、牧師の指名により教会員が選挙し、四季会の承認を得た者である。前掲書（『京のある教会の歩み』一八二頁、「教会日誌一九三九―一九四〇京南教会」（日本キリスト教団京北教会、学院史編纂室資料、Y&K）として名を連ねていた。

- (47) 「定方末七郎書簡―西川玉之助宛―」（一九四〇年二月一五日）。後に西川玉之助より神崎驥一院長に、さらに、神崎元院長の遺族より学院に寄贈され、現在学院史編纂室が所蔵。

- (48) 武藤健『中央会堂五十年史』（中央会堂、一九四〇年、二〇〇―二〇三頁、二二六―二一九頁）。同書によれば、中央会堂（本郷中央教会）の五〇年記念事業では末七郎は記念伝道部と施設改善部に、妻徳子（とく）は記念祝賀部に属していた（同、二二七―一九頁）。前掲書『本郷中央教会七十年の歩み』（四八頁、五五頁）、前掲書『本郷中央教会百年史』（八〇―八二頁、一六一頁）。



一九〇九年三月、建立された戦捷記念碑。
左から二人目に定方の文字が刻まれている。
アルバム「旧関西学院時代Ⅱ」より

- (49) 前掲書『聖徒のあしあと』六二頁。
- (50) 前掲書『聖徒のあしあと』六六～六七頁。「この自宅焼失で、血の滲む思いで画いた傑作は次々と目前で劫火に罹っていったのであった。さらに、帰郷した香登で、悲願ともいえるキリスト像を画く最適の場所と、武用一家の豊かな友情を得て次々と傑作が生まれた。」
- (51) 前掲書『聖徒のあしあと』五九頁。定方信子氏からの聞き取りによれば、一九五五年頃から定方は「基督は描けなくなった」と話していたということである。
この指摘を裏書するように、本論文の作品一覧においても、一九五五年以降年代が判明しているもののうち、基督像を描いた作品はみあたらない。
- (52) 前掲書『聖徒のあしあと』六七～六八頁。
(伊藤笙子・井上琢智)

定方末七郎 家族構成 (系図)

